

令和4年度 第2回インクルーシブ教育（支援児包容教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和4年12月9日（金）14時00分～16時00分

□開催場所：駅北庁舎4階 第2・第3会議室

□出席者（敬称略）

・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 土本雄司 西尾 実 保 義博 長谷川義弘
高木千穂子 岡 英樹 水野恵美子 長谷川邦代 石黒祐子 吉田香奈子

・事務局：渡辺 教育長 高橋 副教育長 林 教育次長 吉川 教育相談室課長代理
立間 教育相談室指導主事 皆川 子ども支援課総括主査 石田 福祉課障がい者支援G
長谷川 子ども支援課障害児巡回支援専門員 鈴木 保健センター発達相談支援員

・基本施策1 研究実践報告者：北栄小 澤矢教諭

1 あいさつ
教育長あいさつ

2 報告

事務局：基本施策2・3の内容、進捗状況について説明

委員長：本校では、発達通級に1名が在籍しており、その指導のお陰で楽しく安心して学習を進めている。
来年度は5名が在籍する予定。発達障害をもつ生徒の保護者に、進路に不安を抱えている人が多いという実感。中学生になってから発達障害がわかり、現在の制度では、中学校の発達通級を利用できない生徒がいる。適切な支援が受けられないため、通常の学級で落ち着いて授業に参加できないが、もし通級が利用できたらよりよい進路選択ができるかもしれない。地域の陶技学園の相談センターに相談したという人も3名いた。報告からも、中学校発達通級のニーズの高まりを感じた。

委員E：本校からも来年度、中学校通級を1名が利用する予定。中学校通級担当の先生から出される通信が大変に読みやすい。今回の通信は、ソーシャル・スキル・トレーニングのやり方や実際の指導の様子を具体的に記載してあった。中学校進学に不安のある児童の保護者にそれを示し、中学校通級を勧めることができた。とてもよい発信がなされている。

委員A：主に基本施策2に関わって、一つ目に、6年生14名のうち10名が中学校通級に継続するのは、小学校通級の指導の効果が上がっているからだと思われる。一方で、来年度の通級在籍が21名ということで、今後も中学校通級の拡充が望まれる。二つ目に、来年度は4小学校に発達通級指導教室を設置することについて、校内で通常学級とより緊密な連携ができるというメリットが生まれるが、一方で、担当者間の連絡や、担当者が集まってのスキルアップなどが困難になる。リモートの活用もできるが、これまで例えば根本小などでは、3人の先生がお互いの指導を見合ったりして切磋琢磨されてきた。そういうことが難しくなりそうなので、担当者間のネットワークや担当者会といった場をつくり、通級の指導力向上に向けた人材育成を併せて考えてほしい。

委員I：隣に小学校があり、普段から園に様子を見に来てもらったり交流があったりで園児のことをよくわかってもらっている。来年度は、特別支援学級に何人かが入学し、通常学級でもスマイルブックを引き継ぐ児童がたくさんいるが、連絡が密にできているので安心している。

委員J：本園からはいろいろな小学校に就学するので、それぞれの学校と、幼保小連絡会やスマイルブッ

クの引継会、支援シートなども活用しながら、連携を図っている。小学校からの個別の問い合わせなどもある。

委員H：WISC-Vが今年2月に使われることになったが、その研修のためのセミナー等がなかなかなかった。しかし、特別支援教育コーディネーター研修会で、中野先生に講話をしていただいた。近隣の病院もⅣからⅤに移行しており、笠原小でWISCを受ける児童も皆Ⅴであった。早い時期に聞けて、本当に勉強になった。

事務局：基本施策4・5の内容、進捗状況について説明

委員A：基本施策5に関わって、中学校や小学校の指導の様子を園の先生が見ることは、縦の連携という点で、園児が将来思春期にどうなるかなど、その姿をイメージすることは大変に意義がある。どんどん実施してほしい。基本施策4について、中学校の相談人数がかなり少ないのはなぜか。

委員長：中学校では、中1の生徒の困り感が出てきて相談することが多い。しかし、夏から秋にかけて、発達障害をもつ子が、体育祭などの密接な人間関係の必要な行事などの中で不適応となることもあり、就学等支援委員会にかけるといった目的ではなく、相談や医療の機関につなぐといったケースは頻繁にある。

委員A：かなり個別になっているということか。クラスの中ではなく、個別対応のニーズが高まっているということか。

委員長：巡回相談は、特別支援学級や通級指導教室への入級を目的として相談している。

委員A：授業や活動での困り感に対する指導支援のあり方については、巡回相談の主となる対象ではないことがわかった。

委員E：今年は、東濃特別支援学校の地域支援センター長の先生が、幼保小などの困り感の強い児童の巡回相談に来てくださり、専門的に見てたくさんのアドバイスをしていただいた。それによって、就学等支援委員会でもスムーズな議論ができた。今後も力を貸してほしい。

委員A：中学校を見に行くと、印象として、特別な支援のニーズの高い生徒がいるとき、問題は先生の授業の方にあることが多い。その場合、生徒はつまらなくしていたり暴れていた、反対にげそつとしていたりする。できれば、授業のあり方も含めて巡回相談の対象にしてはどうか。

委員L：我が子（上の子）は保育園に通っているときには、なんとなく他の子と違うかなと思っていた。小学校入学時の就学先をどうするかというとき、園や小学校の先生に親身になって相談に乗ってもらえた。親の気持ちとしては、まだ、どんな、どの程度の障害があるかわからないため、願いとしては通常学級に行かせたいが、子の困りごとを考えたら支援学級に、というように揺れ動くものがあった。幼保の相談件数が多いのは、自分では解決できず決定する勇気もないという保護者が多いということではないか。我が子は小学校卒業時の支援学級か特別支援学校かの選択のときに、だいたい発達の具合がわかってきて、今後のひとり立ちのためにどういう支援が必要か、効果的かを考えて意見が定まり、相談したいことははっきりしてきた。子どもたちも思春期になり、なかなか困り感を表に出にくかったり親に相談しにくかったりするのではないかな。先生方にはそういう点を見てもらえるとよい。

委員K：我が子は6年生で、現在地域の小学校の支援学級にいる。中学校への進学に際して、もともと特

別支援学校を考えていた。巡回相談で実際に本人を見ていただき、地域の中学校の支援学級へ進学という意見ももらったと聞いた。本人の可能性を認めてもらえ、親には見えない学校生活の中で、本人ががんばっている部分があるのだとわかり、大変にうれしかった。結果は、特別支援学校へ進学としたが、巡回相談で実際に子どもを見てもらい、いただいた意見は参考になったし、巡回相談で見てもらい、家族で考えるという過程が大事であった。巡回相談を今後も大切にしてほしい。

委員F：縦のつながりという点からすると、東濃特別支援学校は、地域のセンター的機能を果たしていかななくてはならない。要望にもできる限り応えていきたい。また、特別支援学校でも、授業改善を常に行っていかなければならないと感じている。内容や進め方がわかりづらさを生んでいないか、どうしたら子どもたちが身近に感じられるかを、常に工夫していかなければならない。

委員長：東濃特別支援学校のセンター的機能の利用状況はどのようなか。

委員F：センター長は、頻繁に小中学校を訪問している。学校にいる日より訪問に出ている日の方が多いほど。東濃特別支援学校として、地域のニーズや地域の子どもの状況を把握することもできる。今年は特に多い。

事務局：基本施策1の内容、進捗状況について説明
北栄小からの研究実践報告

委員G：今年は支援学級担任で、在籍は4名だが、少人数であっても「どの子も」ということになるのが難しい。みんなで一緒に行う学習や活動を、「どの子も同じように楽しむ」「どの子も同じように学ぶ」ことが難しい。通常学級の大人数ではなおさらである。また、「北栄スタンダード」が参考になった。「スモールステップ化」は、とても大事だと感じている。取り組む本人ができそうだなと思えないとやる気をなくしてしまうので、日々意識している。授業の流れの中で、どんな困難な状態が起きるかという視点を持ち、そこから配慮すべきことを組み立てていく「北栄スタンダード」を参考にしながら、今後自らの授業改善を図っていきたい。

委員長：研究内容1の3つの具体的方途のうち、一番効果的だと実感があるのはどれか。

北栄小：どれも欠けてはダメだが、ねらいや授業展開の「焦点化」がとても大切。ねらいが絞られなかったり、学習活動がたくさんあったりすると、スタートラインに立てない子が出てしまう。発問・指示も大切。声の大きさ、スピード、言葉の数、不必要な言葉を削ぎ落とすことなど、互いに切磋琢磨してきた。

委員H：「児童の実態」に「集中して取り組む力に弱さ」とあるが、45分間、全員が集中していることが前提ではなく、そうでない子がいることを理解して授業を考えなくてはならない。その点からすると、特に「視覚化」を大切にし、ICTなどを活用して工夫するとよい。

委員E：特別支援学級の授業公開では、「わかった」「できた」に加えて、子どもたちが「楽しい」という活動が入っていた。また、終末には、地域に出て本物に触れるという活動が入っており、支援学級の子どもたちにとって、より楽しくてわかりやすい授業であった。

委員長：中学校の特別支援教育にとって学べると感じたのは、キーワード化して職員全体の共通意識化を図ること。通常学級の授業で、生徒が「わかった」「できた」という喜びを実感できない授業の特徴は、見通しがもてない授業である。

委員F：特別支援学校でも、「焦点化」「視覚化」「共有化」、特に話し合い活動、自己理解・他との共有を大切にしている。「北栄スタンダード」の「深い学びにつなげる工夫」として、「学んだことを生活につなげる事象の提示や考える場の設定」とあるが、特別支援学校では教育課程が柔軟なので、生活の場に生きる内容を授業で扱おうという、逆の視点から考えており、常に授業と生活とが密着していることを指導している。また、特別支援学校は教育課程がいくつも分かれており、カリキュラム、授業が別々に行われている。いろんなことが個別に効果的には進められているが、インクルーシブの観点から、隣のクラスが何をやっているか、隣のクラスとどう関わり合うかが弱くなっている。「できた」「できない」や○△×の評価より、子どもたちが次への意欲をもつのは「ありがとう」や役に立ったという視点が大切だと考えている。そこで、生活との密着という点と重ねて、困っていることを挙げ、授業とも関わらせながら、生活の中で互いのつながりや感謝し合える状況を作ることに腐心している。

委員B：「焦点化」は大事。「視覚化」は、子どもによっては「視覚化」により理解できない子が出てくる。読字書字障がいの子など。板書や掲示の活用により困る子もいる。「感覚の活用」に「実演」とあるが、お手本を示し、一緒にやり、一人でできたらほめることが基本。「共有化」も大切。生徒同士の話し合いに加え、先生と生徒との話し合いをよくやっている。そのとき、先生と子どもが「共視」し、共有することが大切。その視点があるのかは疑問。「ほめて育てる指導」とよくいうが、「自尊感情」には「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」とがある。成功体験をほめられるだけの子は挫折したとき落ち込んでしまう。「基本的自尊感情」は落ち込んだ時にも立ち上がる力をもっている。「基本的自尊感情」とは、自分は苦手なこともあるしできないこともある、でもこれらはできる、自分の苦手さもできることも自覚している、自分は自分でよいのだという自尊感情、これが大事。ありがとうや感謝は、「基本的自尊感情」につながる。ありがとうと言われる人、言える人に育てることを基本としつつ、加えて「社会的な成功体験」を積む両方の教育が大切。

委員C：自分の意見を言えない子が多い状況が改善されたという北栄小のアンケートの結果は、意思表示ができるようになったということであり、「北栄スタンダード」は我々の施設でも参考になる。障害者の権利条約に係る国連の答申（勧告）は、世界標準から見ると日本はかなり遅れているという厳しい内容であった。「脱施設化」ということが言われている。「けやき」は、20年前に、どんな障害のある人も地域で生活できるようにという理念で立ち上げた。施設の中ではやれていても、家庭に戻ると家族とのトラブル、暴力行為などの事例がある。家庭との連携が課題となっている。答申では、特別支援教育も差別としている。すべてをインクルーシブ教育にすべきという内容。日本全体ではなかなか進まないが、多治見ではインクルーシブを広げていこうとしているのでありがたい。

委員B：子ども個々の特性、生活環境、成育歴を十分把握しないといけないが、これを教員がやろうとすると負担が大きい。個人の教員だけでは難しいので、組織や大きなバックアップがないと大変だが、それについては何か考えているか。

北栄小：どの学校でも同じだが、学級担任だけで抱え込まないようにしている。本校では、特別支援教育コーディネーターが中心となって、子どもにどう関わるか、保護者と連携しながら個別の支援計画を作成し、それを窓口で支援を行うと共に、成育歴やどんな支援が有効だったかなどを一つのファイルにまとめて、みんなで引き継いでいくようにしている。困ったら、チームで対応するようにしている。限られた時間の中で不十分な点も多いので、より多くの事例など勉強をしていかななくてはならないと感じている。

委員D：発達支援センターでは対象が未満児や通園児だが、個々に特性が違うので、療育の仕方も別々に

なるが、北栄小の研究内容の「焦点化」のねらいを絞ることや、「視覚化」により見通しがもてるようにする工夫など、療育においても同様の視点だと感じた。その中で、大人の力も借りながら、できたという達成感をもたせようとしている。また、基本施策3の特別支援教育コーディネーター研修に関わって、療育に通う児童の保護者からも、就学に向けて、学校の教員に発達支援の指導について研修し理解して実践に活かしてほしいという要望があったが、この施策を頼もしく感じている。今後も継続してほしい。

委員A：学校の教員とそうでない委員とでは視点が違うが、(北栄小の実践は)、それぞれの意見の内容がつながり盛り込まれたものであった。単にユニバーサルデザインの授業研究にとどまらない、これからの学校教育全体の大事なことが詰まっている、包括的な取組であった。学校の子どもの実態に即して、「考えて表現する、伝える」という課題を十分に見据えて取り組み、成果が出たというストーリー性もあった。また、授業のUD(ユニバーサルデザイン)化のみならず、「個別最適な学び」を追究されたが、ここには、特別な支援を必要とする個々のニーズに基づく個別の支援計画・指導計画の作成から、すべての子どもの個別最適な学びへという連続性、つながりがあり、インクルーシブの方向に向かう取組であった。自立的な学びを促すことも提案された。さらに、評価に関わって、「わかった」「できた」という達成感をもたせようとした。学校では、日本ではやっと「ほめて伸ばす」ことが言われるようになってきたが、今後の方向として、子どもたちが自分はこのやり方でやりたいという思いを満ちし、一つの授業や単元の枠組みだけでなく、長期的ながんばりができていく仕掛けをしていくとよい。プロジェクト型学習、スキーム学習などとも関わらせながら、本当の達成感、手ごたえにつなげていきたい。公開授業の中では、とりわけ、体育の授業で、子どもがのびのびと運動する様子があった。動物の動きがイメージしにくい子には、映像を見せたり、他の子を真似させたりなど、「わかった」「できた」につながっていた。こういった視点が他の授業にもたくさん見られた。今回の発表は、これからの学校教育の全体的な方向を示した、包括的な取組であったので、今後、多治見市全体に広げ、発展させてほしい。

3 あいさつ

副教育長あいさつ